

原山出土の遺品

原山は、四王寺山南東麓に位置し、延暦寺僧円珍の門人が開いたとされる無量寺があった場所です。

近年、名古屋市にある大須観音宝生院の真福寺文庫から、臨濟宗の開祖・栄西が2度の入宋の間に今津（現福岡市西区）に住んでいたころの著作や書状が大量にみつけられ話題をよびました。栄

西はその著書に、原山には数百人も僧侶が住み、学問修行に研鑽をつんでいる非常に栄えた寺院であったことを記しています。原山無量寺は現在残っており、関連する史料も少ないためその内実がよく分からないのですが、この栄西の記述は当時の原山の規模を推測させる重要なものです。

この原山から銭弘俶八万四千塔（部分）が出土しています（原遺跡第3次調査）。銭弘俶八万四千塔とは、10世紀の中国浙江省のあたりにあった国（呉越国）の王・銭弘俶（在位948～978）が、インド・マウリヤ朝（紀元前3世紀中葉）のアショールカ王の故事にならい、銅・鉄などを用いて作った小塔です。日本では現在までわずか9基の完品と2例の出土例が確認されているのみですので、大変珍しく、貴重な資料といえるで



しょう。

出土したのは高さ3.7センチメートルほどの屋蓋四隅の方立部分です。全体が緑青に覆われてはいませんが、外側2面に棒状のものを持った神将像を、内側に仏龕内にすわる仏坐像をレリーフで表現していることがはっきりと確認できます。昨秋市制施行30周年を記念して行われた「まるごと太宰府歴史展」（太宰府市文化ふれあい館）でも出品されましたので、ご覧になった方も多いかと思えます。

このほかにも、大宰府周辺にはもとと宝満山にあったという薩摩塔のような中国由来の石造物が残ります。また、岡見山（水瓶山）で行われていた雨乞い（あまごい）に使用される経筒（きやうとう）には、「執筆入宋比丘永宝」と記されており、大宰府周辺にいた留学僧の存在が知られます。

今回紹介した銭弘俶八万四千塔も、ほんの一片の遺物ではありませんが、10世紀の中国でつくられたものが、はるばる海を越えて、この太宰府までもたらされてきたというところに、アジアに開かれた当時の大宰府の姿を感じることができます。